様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月　 ５ 日現在

機関番号：２４６０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2013～2015
課題番号：２５５８００６１

研究課題名（和文）Charles Lambのロマン主義作家としての位置付けを見直しする

研究課題名（英文）Reconsidering the position of Charles Lamb among the Romantic writers

研究代表者
吉田　泰彦（YOSHIDA, Yasuhiko）

奈良県立医科大学・医学部・准教授

研究者番号：４０１４５９０９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的はチャールズ・ラムを現代的価値のあるロマン主義作家の一人として位置付けることである。現代の一般読者及び英米文学会において凋落著しいラムの声名を考えると、伝記的掘り起こしでは十分な再評価は不可能という結論に達したので、ロマン主義文学の形成に大きく関与したクーパー、ギルピン、その他旅行記作家、さらにはロマン主義第一世代詩人たちによる著作と言説を、「ロマン主義と外界描写」をキー概念として分析することにより、ラム文学の特質が同時代詩人のそれと同等の真摯なものであり、さらには、彼らの作品に見ることの困難なラムの都市的性質こそがロマン主義の既成概念を拡張するに値する貢献であることを論証した。

研究成果の概要（英文）：The aim of this research is to map Charles Lamb among the serious Romantic writers who have acquired high modern values. Considering the Lamb's current low reputation among both modern readers and critics of English literature, I decided that larger-scale digging should be needed as something like biographical reviewings would not be able to perform enough revaluation. Thus I have embarked to analyze the works and discourses of such writers who greatly contributed to the development of the English Romantic literature as William Cowper, William Gilpin, Robert Warner, William Hazlitt, William Wordsworth, and S. T. Coleridge from the viewpoint of “the significance of Romantic description of outside world” to find out that Lamb's literary distinctive aims and features are equivalent to those of the great Romantic poets and that the city-life obsession peculiar to him makes him an important enlarger of the ready-made concept of the nature-worshipping English Romanticism.

研究分野：人文学

キーワード：チャールズ・ラム　ロマン主義と外界描写　視覚的・絵画的表現　風景　ピクチャレスク　ロマン主義的想像力　都市と世俗的ロマン主義　環境と文学

１．研究開始当初の背景

チャールズ・ラムは存命中から 20 世紀初頭くらいまでは、主として個性的文体をもつエッセイストとして楽しんでよく読まれた人気作家であった。第一次大戦という生死に関わる過酷な経験をした英米においては、彼の特徴とされる風変わりなディレッタント的性格が災いして、ラムの本質は「遊びの文学」という見方が定着するようになり、文学に人生との真剣な対峙を求める現代の読者あるいは英文学研究者における彼の地位は凋落したままである。

その一方で、20 世紀から 21 世紀にかけてロマン主義研究は隆盛を極め、すでに正典とされているロマン主義詩人は言うに及ばず、Charlotte Smith、Felicia Hemans 等の女性詩人、あるいは Jane Austen に始まり Ann Radcliffe、 Frances Burney、Mary Shelley 等の女性小説家、さらには Mary Wollstonecraft、Hester Chapone、Hannah More 等の女性社会改良家の研究も 20 世紀後半くらいからますます盛んになっている。一方、ロマン主義期の文芸批評家・エッセイストとして活躍した William Hazlitt、Thomas De Quincey、Leigh Hunt の中でかろうじて、Hunt が政治活動家として命脈を保っているくらいである。昨今の研究・批評動向を一言で言うならば、政治、社会思想、ジェンダー、環境等様々な視点からの研究はなされているが、唯一抜け落ちているのは「文学的」研究といっていいであろう。このような傾向は日本も英米も同様である。

したがって、例えばこの度の 2015 年度研究の中に含まれているラムのエッセイ「煙突掃除人の讃」などは、テーマとしては政治思想あるいは社会改良的なアプローチの可能性はあるものの、ラム自身がそのようなメソッドを意図的に避けているのであり、またエッセイストとしてのラムの総体的な姿勢がこのようなものであるから、一見言葉をこねくり回しているようにみえるラムが不人気のままであるのは無理も無いことと言わざるを得ない。

２．研究の目的

本研究の目的はチャールズ・ラムを現代人・現代社会にとって価値のあるロマン主義作家の一人として位置付けを再定義することである。ラムの本質が「遊びの文学」にあるのではなく、真摯で全人的な姿勢が当時勃興しつつあった政治経済・社会改革の実用主義的言説から距離を置かせたということを前提として、ラムが行き当たりばったりの、気まぐれな文飾家という表層の下に、同時代人であり親しい友人であったワーズワスやコールリッジと人生観、問題意識、表現手法を共有する真剣な作家であること論証する。

さらには、現代風の表現をすればサラリーマンとして都市生活を送りつつ、大多数の一般庶民からなる都市居住者の社会のあり方に共感の目をもっていたことが、上記の友人詩人たちと一線を画する資質であり、ラム自身がこのことに十二分に意識的であったことを解明・論証する。

３．研究の方法

本研究申請時、あるいは 2 年目開始時にはラム姉弟による書簡、あるいは交際のあった種々の文人たちによる書簡等を駆使した伝記的研究方法を視野に入れていた。特に 19 世紀評価の精髄といっていい「聖人ラム」という視点、狂気を病んだ姉メアリーの世話を一手に引き受けて、文筆専業者としての願望を犠牲にして結婚をも諦めて会社員生活をほぼ定年まで継続した稀有の人格者という見方を無視することが非常に困難であったからである。ただ、上述の視点を模索しつつ研究を続けるうちに、伝記的手法の限界点、すなわち、ラムを内側から再点検するのみでは根本的な再評価は困難であると結論せざるを得なくなった。

このようにして、何度かやりかけた伝記的、またラムによる著作に限定した手法は今回棚上げにして、ロマン主義文学の形成・発展という巨視的なパースペクティブの中にラムを位置付けるというアプローチに軌道修正を行うこととなった。このようにして、2013 年度はラムのエッセイ数編をモデルとしてワーズワス・コールリッジの作品との比較検証を経て、ラムがロマン主義的特質を共有していること、また彼らとの差異は何かを追求した。ただ、このような短絡的な手法では強力で確固とした位置付けには不十分であることを悟り、最終的には、ロマン主義運動の生成・発展の中に位置付ける方法に行き着いた。

かくして、2014 年度は前期ロマン主義詩人 William Cowper を視覚的表現という視点から掘り下げ、2015 年度前半はピクチャレスクの最重要作家ギルピンを絵画理論と自然の風景という視点から彼の風景観の展開を分析、また後半は、文学史上ギルピンとロマン主義中心詩人たちとの仲立ちをしているとみられる Thomas Gray、Richard Warner、Thomas West 等旅行記作家に言及しつつ、最終的にワーズワス・コールリッジの文学世界とラムのそれを綿密に比較分析して、彼らとの共通点・相違点を明らかにする作業を通じてラムをロマン主義の潮流の中に位置付けた。

４．研究成果

(1)2013 年度に発表した「ロマン主義作家としてのチャールズ・ラム」では、まず最初に、ラムの英米での今日的な位置付けについて W. F. Courtney の *Young Charles Lamb* (1983) を引用して「ラムは今日少しばかり流行からはずれてはいるが・・・熱心な愛好者惹きつけ続けている」と要約した。日本におけるラム研究第一人者福原麟太郎の『チャールズ・ラム傳』(1963)が同時代のロマン主義詩人た

ち、文学者仲間との親密な交友について触れていても、ラムの特徴を表すのにロマン主義といった形容句を用いることは絶えてないことを指摘した。さらに『ブリタニカ国際大百科事典』がワーズワス、コールリッジについてはフランス革命との関連に注目し、「ロマン主義の開幕を告げる詩集『抒情歌謡集』(1798)を共同で発表」と記すのに対して、ラムについては、「随筆家として自伝的なものをはじめ身辺のくさぐさの事柄を取上げ、しみじみとしたユーモアと情趣をたたえる作品をものした」との記述があるのみで、ロマン主義的な特質には言及していないことを述べてから、これに対して、本研究ではラムによる数編のエッセイを用いて、そのロマン主義的特質を探ることを目標とすることを明言した。

ラムは 1796 年起きた姉メアリーによる母親刺殺事件を機に文筆家・詩人としての将来を諦めるけれども、彼はその後公私にわたる交際の中で、友人たちが新しい詩の地平を切り開いていく様をつぶさに眺め、その新しい潮流の意味を真髄まで理解し、評価していたことを指摘。そして『エリア』エッセイ集には遅れてやってきた『リリカル・バラッズ』という側面があることを論証した。①例えば、「酔っぱらいの告白」(1813)は予備知識なしに読むと完全な実話と誤解するほどの、読者の想像力を高度に刺激する力量を示し、②「ジャクソン大尉」(1824)は、抽象概念である想像力を一人の人物として造型して、実話の枠組みの中で描出することに成功している。③「南海会社」(1820)のテーマが「過去」についてであり、過去と現在が地続きであることを頑固に主張する「私たちは七人」(1800)、想像力による幼時の幻視的な時の再現を願う「カッコウに寄せる」(1807)、あるいは、つぐみの鳴き声を聞いて突如として故郷の景色を眼前に浮かべる出稼ぎ少女を描写する「哀れなスーザンの夢」(1797)等々、人と過去との強固な結びつきを歌うワーズワス諸作品との共通点があることを指摘した。④「H―シャーのブレークスムア」(1824)は消滅と想像力のテーマを、ゆかりの屋敷が完全に取り壊されて、よすがとなる建物の切れ端さえ残存せずに、唯一の手掛かりはエリアの心の中に残る記憶という切羽詰まった状況の中で展開する。そして、作品中に現れる「わたしの選び取った牢獄」という一句には 1797 年にコールリッジがラムに贈った著名な詩「この菩提樹の木陰わが牢獄」のモチーフが読み取れること、さらには、壁に囲まれた不可侵の土地、神聖な流れ、巨大で意義深い建物、という設定に加えて、今は亡き壮大な遺跡を想像力によって再現するというテーマもまたコールリッジの「クーブラ・カーン」(1798 年制作)にみられるものであることを指摘。⑤また、「ハーフォードシャーのマカリー・エンド」(1821)に関して、ワーズワスにとっての自然はラムにとっては生きて活動する人間という前提に立つならば「マカリー・エンド」と「ティンタン・アビー」(ワーズワス 1798)の間には、両者とも主題はゆかりの地の再訪であること、お供の女性がなくてはならないほど重要な役割を果たすという２点の事項によって、男性原理と女性原理がともに補い合う世界を形成するという共通点が見いだせること論述。⑥さらに、1798 年に発表されたコールリッジの詩作品を二編(「孤独の不安」、「真夜中の霜」)取り上げて、コールリッジの詩にみられる<主題が遅れて現れる>構造、さらに、詩の中心的な論理に直接的には結びつかない<細部の事実に関する強い関心>が、ワーズワスの中心をまっすぐに力強く進む書法とは異なり、ラムはこの点でコールリッジにより近いことを論じた。

(2)2014 年度に発表した「ロマン主義的風景の変遷―ラムへ至る道　その１(クーパー)」はクーパー、ギルピン、そして、ワーズワス・コールリッジ・ラムを風景という視点から検討するために、その１としてクーパーを取り上げた。彼らにとって風景がどのような意味をもつかを辿ることにより、ロマン主義文学における人と外界との関係の変化を探る試みである。

クーパーの土台はキリスト教道徳家であり、しかも福音主義者であったので、詩作は芸術的な活動であると同時に宗教的実践であったこと、そして、この特質は彼の詩の内容のみならず、文飾あるいは文体にまで影響を及ぼしていることを結論付けた上で、クーパーが「科学革命」の影響を強く受けていることを彼の諸作品を通して例示した。①科学革命の代表者二人、ヨハネス・ケプラーとアイザック・ニュートンの言説から、「世界（宇宙）は慈悲深い創造主によって、解明可能な計画に則って、構築された」(ケプラー)、また、「太陽系の惑星が太陽を中心としてほぼ同一の平面上を同心円上に回転し、また、その他の恒星系同士がその引力によって互いに衝突し合わないように遠距離に配置したのは、単なる機械的な要因ではなく、神の配慮」(ニュートン)という科学革命期の世界観を概観。また、クーパーがニュートンの著作に親しんでいたと推測させる『課業』(1785)の記述から、彼の科学革命に対する態度が単なる時代の平均的知識以上のものであったこと、そして、科学研究が信仰と結びついたものであることに賛意を示していることを確認した。②そして、クーパーの『隠棲』(1782)にみられる創造世界の精密な描写が当時の科学的成果を踏まえたものであることを詳述。例えば「こちらでは卵から孵り、あちらでは変態した虫たちが／新たな命を授かって、明るい世界を住処とする／かつて地に寝そべっていたものが、今や宙に浮かび」が 1665 年に顕微鏡と望遠鏡による観察結果を収録した *Micrographia* を公刊した

Robert Hooke (1635-1703) の言説とよく一致することを説明。さらに、その宇宙描写からは、地球を含めて太陽系の惑星が太陽を中心として、その光の恩恵を享受しているという見解、あるいは、深海に見立てた宇宙空間で星々はそれぞれの定位置に碇を下ろした船に例えられていることから、天文学的な知識が基盤となって世界像が構築されている様子を見て取ることができることを述べた。③次にクーパーの暗喩の使用法を検討して、聖書の定型的な表現法を利用して個人的な状況を述べるというクーパー独特の習癖を観察・叙述して、個人が教理に呑み込まれたというよりは、伝統語法を積極的に私有化することを通じて、結果的に、私的感情・私的状況の公有化という可能性が生み出された可能性を説明した。④『課業』の中のピクチャレスクな風景描写の典型例として著名な一節について、今村隆男氏と P. M. Spacks の見解を紹介して、クーパーの風景には「純粋に美的な現象」に対するアプローチ以上のものが含まれている可能性を提示。文学的主題としてみるにはほど遠い、ついでといった調子で触れられている人間的事項がロマン主義詩の〈人に結びついた叙情的風景〉を予感させることを論述した。⑤続いて、オーガスタン文学とロマン主義文学との橋渡し的な特質が見て取れる詩行を数点例示。「彼は歩く、彼は跳ぶ、彼は走る―歓喜の翼に乗って、／そしてはね回る、かぐわしい風が一吹きするたびに.」の詩行については、芸術家が風景を外側から観察して記述するというスタイルは廃されて、社会的随伴物も一切脱ぎ捨てて、ひたすら原始的な存在になりきって自然と一体になる人の様子が浮き彫りにされていることを説明。また、ロマン主義文学の典型的なテーマである散策と回想を記す一節については、格別な社会的意味付けをしにくいような子供時代の思い出が詩の主題として選ばれていることに着目した。さらに、

ここには騒音はない考えを妨げる音もない
駒鳥は囀っているが、か細い調べで
満足して、半ば以上は声を抑えている。
独り居に気をよくした小鳥は、小枝から小枝
　へと
身軽に跳び移り、あちこち止まったところで
枝先から垂れた氷の玉を振り落とし、
下にある枯れた葉っぱをかさつかせる。
静けさ、これほど幽かな音の混じった静けさ
　は
無音より魅惑する。ここで瞑想すれば
数時間も数瞬となるであろう。ここでは心が
頭に有益な教えを授けることができようし、
知恵の書物なくして学びつつ、賢くなれる。

上の一節に関しては、観察対象への没入を含む視覚的・聴覚的体験を哲学的な感覚で表現しており、クーパーが時にワーズワスやコールリッジに近接することを主張した。

(3)2015 年度に発表した「ロマン主義的風景の変遷―ラムへ至る道　その２(ギルピン)」はロマン主義的風景の形成に影響を与えた William Gilpin (1724-1804)の果たした役割を彼の著書を通じて調べることを目的とする。ピクチャレスク流行の始まりの時期までに公刊された『庭園対話』(1748 年)、『版画論』(1768 年)、『ワイ河紀行』(1782 年)の 3 作を取り上げた。ギルピン独自の特色は絵画美術理論家という特質である。①そして、上記３作のうちで最も理論的な著作は『版画論』である。この時代一流の美術作品を鑑賞するする手段は、本物以外には、複製画すなわち版画を通じるしかなかった。したがって、社会における版画の重要性、鑑識眼の重要性も高かったのであり、この本は版画趣味の人に実用的な知識を与えるためのガイドブックとして目論まれている。ギルピンの基本的なスタンスはアリストテレス以来のミメーシス論であるが、自然のあるがままの姿を写生した結果が、必ずしも芸術作品としての資格があるとは限らず、〈真実を損なうことなく美を与える〉ことが、彼にとっての結論であることを論じた。ただし、Salvator Rosa (1615-73)の描写についての陳述から〈実在する人々の、ある特定の場所における生活ぶりについての意義深い体験こそが表現の根源である〉こと、したがって、〈ある作家個人と結びついた風景が存在する〉という考えが示唆されていて、『版画論』の枠組みばかりか、彼のピクチャレスク観をも超えて、イギリスロマン主義文学第一世代の文学観に近づいていることを指摘。②『庭園対話』に提示されている根本的な姿勢は「われわれは自然を〈造る〉ことはできない、われわれにできることは精々自然を〈改良〉するくらいだ」であり、この思想が、自然には潜在的に〈改良〉すべき余地があることを前提としていることを論じた。③『ワイ河紀行』の構造について、３層の美学理論の混在 (1.ワイ旅行以前に確立されていたもの、2.旅行の途次に発展したもの、3.それ以降にさらなる発展を遂げたもの) を仮説として提示。第１層は自然美鑑賞における絵画理論の実践例である。ピクチャレスク運動は主としてこの層と関連したものであり、当時の観光趣味に最も影響を与えたのはこの層であった。第２層の主要な特徴は動きである。「まるで魔法の力に影響されたかのように、景色は常時ころころと変化していた」という述懐は、彼の経験が彼自身の制御を外れたところで生起していることを示している。また、時に『版画論』以来大切に守ってきた美学理論をまるで便宜的な価値しかないものであるかのように批判的な物言いさえすることに注目。第３層は想像力の働きである種々の要素を統一して、ひとつの有機体とする力を扱っている。目に見える物体がもつ精神に働きかける影響を媒

介とした統一力から、物理的な現象をきっかけとすることのない純粋に精神の働きによる創造力までをカバーしている。このようにして、絵画理論から始まってピクチャレスク風景を通過し、想像力の作用にまで到達したことによって、ギルピンはロマン主義文学の中心地近くまで辿り着いたことを主張した。

(4)2015 年度に発表した「チャールズ・ラムとロマン主義的風景」においては、ロマン主義的風景が、単に審美的というより、人間的に意味を持つ風景であることに着目した。Annibale Carracci の“Domine,Quo Vadis”が実話性、すなわち、寓意的英雄物語の永遠性の覆いを剥ぎ取られた、＜特定の場所に結び付けられた有限の人間的経験＞という視点を提供していることを述べて、ロマン主義作家たちを風景に向かわせたひとつの要因として、類型を排除した、個別性への強い関心と願望があったとの仮説を提案した。Robert Langbaum は 18 世紀は「個人が自らの意思と感情の中に感じ取った価値に対応する客体を獲得しないままに」個人を伝統から切り離したと述べた後で、ロマン主義にとっての外界描写の意義を「客観性、すなわち、外的世界への価値の付与を通して社会や自然との結合を果たすこと」と定義する。具体例として、Sir Joshua Reynolds によって制作された二人の Jane の肖像画を用いて、一方が風景は背景としての意義をもつ〈屋内の存在〉として描かれていて、他方は荒れ模様の天候の中、髪と衣服は風に流れ、その動的な姿勢と相まって、〈四大の影響を受けつつ生きる女性〉として位置づけられて、自然は格段の重みをもつことを論じた。①地誌詩から発展した前期ロマン主義時代の英詩は、当初風景が大勢を占め、人物は添え物であったことを述べ、例えば Cowper の「ポプラの野辺」(1784)では、風景とその変化が中心的テーマとして大きく取り上げられる一方で、人物は僅かな存在感を示すのみであり、あるいは『課業』の中のピクチャレスクな風景としてよく知られた次の一節においても、第一義的には審美的対象としての風景であって、その内で語り手あるいは登場人物にとって独占的に意義のある要素は、僅かに過ぎない。だが、このような、かそけき自己主張はワーズワスやコールリッジの詩においてははるかに大きな声となったことを述べた。そして、Hazlitt の証言を引用して、ワーズワスと自然の風景の結びつきの強さが実生活における経験に基づくものであることを論じた。②ピクチャレスク美学の理論家および実践者として知られた作家ギルピンが、ピクチャレスクの唱導者という一般的な評価にもかかわらず、初期の３作品を連続的に読む時、最終的に審美的基準から一歩踏み出しかけていること、また、彼が悲惨な乞食生活をする人々をピクチャレスな風景の中から除外しなかったことからも、ロマン主義的作家として資質を備えていると結論することが妥当であることを論じた。③次に 1798 年発刊の Richard Warner による『ウェールズ徒歩旅行記―1797 年 8 月』(1798)を取り上げた。ギルピンの副牧師を勤め、彼の薫陶を受けたウォーナーはピクチャレスクな風景とのその変化には十分な関心と注意を払って記録しているけれども、おそらくロマン主義作家にとって特に意義のある部分は、土地の文化に深く根差した人生の実話を盛り込んでいることであろうと述べて、ロマン主義文学と関心を共有していることを主張した。④コールリッジの「この菩提樹の木陰わが牢獄」(1797)には探索と発見といった旅行記・旅行案内文学に典型的な要素を備えつつも、高度の想像力という新たな要素が加わっていることを論じた。さらには、人間的共感がこの作品の推進力となっていることを論述した。
⑤最後にラムのエッセイ２編をモデルとして、ラムがロマン主義文学の特質＜特定の場所に結び付けられた有限の人間的経験＞を共有しているか否かという視点から分析した。ワーズワスの物語叙情詩、コールリッジの会話詩と同様に「南海会社」(1820)も事件の現場を特定する陸標、「地図化項目」が物語の構造を堅固に支えていることを叙述。もう一つの共通点「過去と現在の共在」も確認。〈土地の守護神〉をキーワードとして、人と場所の結びつきこそがロマン主義文学が風景を重んじる理由であることを論じた。⑥さらに「煙突掃除人の讃」(1822)をモデルとして、人間と環境がいかに強固に結びつき、より重要なことに、この結びつきに根本的な意義を与えるのもまた人間であるというヒューマニズムに基づいた、現代に通じる思想を探り当てた。また、〈記憶を通じての永続化〉というロマン主義的モチーフがこの作品にも機能していることを確認。最後に彼のワーズワスに宛てた書簡を証拠として、ピクチャレスク的な美の価値を都会の下層庶民の食事風景へと転調する行為がラムの都会生活の経験から生じたものであることを確認。そして、ロマン主義文学へのラム独自の貢献は〈世俗化したロマン主義〉にあることを主張した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）
① 吉田泰彦、チャールズ・ラムとロマン主義的風景、HUMANITAS、査読無、第 41 号、2016、pp. 63-91、
http://hdl.handle.net/10564/3214

② 吉田泰彦、ロマン主義的風景の変遷-ラムへ至る道 その２(ギルピン)、
HUMANITAS、査読無、第 41 号、2016、pp. 39-61、
http://hdl.handle.net/10564/3213

③　吉田泰彦、ロマン主義的風景の変遷-ラムへ至る道　その１(クーパー)、HUMANITAS、査読無、第40号、2015、pp. 49-76、http://hdl.handle.net/10564/3003

④　吉田泰彦、ロマン主義作家としのチャールズ・ラム、HUMANITAS、査読無、第 39 号、2014、pp. 35-57、http://hdl.handle.net/10564/2687

〔学会発表〕(計 4 件)
①　吉田泰彦、チャールズ・ラムのロマン主義的特質、イギリス・ロマン派学会第 41 回全国大会、2015 年 10 月 17 日、奈良教育大学

②　吉田泰彦、ロマン主義的風景の変遷その２(ギルピン)、関西コールリッジ研究会、2015 年 6 月 27 日、同志社女子大学

③　吉田泰彦、ロマン主義的風景の変遷その１-クーパー、関西コールリッジ研究会、2014 年 11 月 29 日、同志社大学

④　吉田泰彦、チャールズ・ラムのロマン主義的特質、イギリス・ロマン派学会第 39 回全国大会、2013 年 10 月 20 日、安田女子大学

〔図書〕(計 1 件)
塩谷清人、坂本武、森松健介、吉田泰彦　他、内田能嗣教授傘寿記念論文集　文藝禮讃―イデアとロゴス―、2016、大阪教育図書、pp. 873-83.

６．研究組織
(1)研究代表者
吉田　泰彦 (YOSHIDA, Yasuhiko)
奈良県立医科大学・医学部・准教授
研究者番号：40145909